

文化 第79卷 第1・2号 一春・夏一 別刷
平成27年9月25日発行

伝統的価値観の国際比較：
日本、韓国、中国、米国における儒教的価値観

大 淵 憲 一

伝統的価値観の国際比較： 日本、韓国、中国、米国における儒教的価値観

大 淵 憲 一

1. 序論

我々はこの10年ほど日本の伝統的価値観の研究を行ってきた（大淵・佐藤・三浦，2008）。その目的のひとつは、現代の日本人の意識と行動を理解することである。日本社会は、近年、社会全体としても個人としても様々の課題に直面しており、その解決策と対処において日本人の価値観が問われることが少なくない。それは、安全保障（国家防衛、国際協調など）、社会保障（年金、保険、介護、雇用とセーフティネットなど）、エネルギーと環境保護（原発再稼働、代替エネルギー、脱エネルギーなど）、経済と雇用（産業構造、雇用・勤務形態、格差と差別化、外国人労働者など）、少子化と女性支援（出産、女性の職業支援など）、それに家族（離婚、育児、青少年、老人など）など多岐にわたる課題である。これらはいずれも日本社会とその中で暮らす人々の生活に大きな影響を与える重要課題であるが、同時に、人々の間で意見が分かれるものでもある。それ故、これらはしばしばメディアで取り上げられ、社会調査などでもテーマとなってきた。

現代日本人の価値観

こうした問題に対してどのような態度を取るかは、個々人あるいはその集合体である社会が持つ価値観によって影響を受けるであろう。価値観とは、何を良いもの、価値あるものとみなすか、その基準としてはたらく心的尺度である。それはある事象に対する人々の好悪感情や支持・不支持の態度を決定し、また、彼らが行動選択を行う際には、内的指針としてはたらくものでもある。

日本人の価値観については毎年のように大規模な調査が実施されて、他の

国々との比較も行われている（例えば、猪口孝・田中明彦・園田茂人・ティムール・ダダバエフ，2007）。そうした調査を見ると、価値観は具体的な選択から抽象的な志向まで階層的な構造を持っていることが窺われる。ある調査では、「道に迷っている人を見かけたら、あなたなら助けますか」といった具体的な選択を尋ねる項目が使用されているが（猪口他，2007）、別の調査では「日本の伝統文化は守るべきである」といった高度に抽象的な価値志向を測定する項目が用いられている。これらの価値観には階層性が仮定されており、ある抽象的価値志向がその下にある具体的な選択を導くと考えられる。

日本人の場合、文化心理学者たちは抽象的価値志向の一つとして集団主義があると主張してきたが（Markus & Kitayama, 1991）、これに異論を唱える研究者もいる（高野，2008）。我々自身が行ってきた研究では、少なくとも欧米人よりも日本人は集団主義得点が高いことが見いだされている（Ohbuchi, 2011）。また、Schwartz Value Survey (SVS) を用いて 72 か国の価値 3 次元（自律性／包蔵、平等主義／階層性、調和／統御）を測定した Schwartz（2008）は、国同士の類似性に基づいて 8 個の文化圏を区別したが、日本は、東アジア諸国が含まれる儒教文化圏ではなく、英米、オーストラリアなどともに英語圏に位置づけられた。こうした知見は、価値は多元的であり、各国はそれぞれ価値のユニークな組み合わせによって特徴づけられることを示唆している。

そうした文化的価値の一面として、我々は伝統的価値観に焦点を当てた（大淵・川嶋，2009a）。どこの国も独自の歴史・文化を持ち、その中で独自の価値観が醸造され、世代間で継承されている。日本の場合、それは仏教、儒教、神道の 3 つの宗教思想とそこから派生した人間観、世界観、処世観を含むものと思われる。本研究では、このうち儒教に焦点を当て、日本人の儒教的価値観を他の国々との比較においてその特徴を探ることを目的とした。比較対象となる国としては、日本同様、人々の価値観において儒教の影響が強いと考えられる東アジア圏に属する中国と韓国、それに加えて、そうした伝統的思想の影響が弱いと考えられる米国を取り上げた。

対象各国における儒教の歴史と現状

日本、中国、韓国は仏教とともに儒教の影響が強く見られる国々である。仏教は東及び南アジアの国々に広範囲に広まり、多様な文化との接触を経てきた

こともあり、その変化も多様で、重層的で複雑な世界観と思想体系を生み出してきた。その結果、現在の仏教は、国によってその様相が大きく異なっている。

これに対して、儒教の影響は日本、中国、韓国の周辺にほぼ限定され、また、その思想内容も時代や国による変化が比較的小さく、現代でも各国において成立当時の姿を比較的良くとどめている。それは、儒教が成立の早い時期から、『論語』や『中庸』など思想内容を文書として残してきたからと思われる。こうした古典の存在が思想内容の変質を防ぎ、比較的一貫した体系として後世に伝えられてきた一因と思われる。

儒教の基本原理は社会的調和と秩序である。社会システムの中で各人は置かれた立場によって異なる役割を果たして社会に貢献することが求められ、それが最大の徳とされる。それは、君臣、親子などの関係性を規定した五輪などにおいて具体的に論じられている。また、儒教は、こうした倫理徳目の根底に、世界の変動を支配する原理としての理と人間内部に同質の性を仮定するなど、体系的な世界観・人間観を発展させてきた。

儒教を宗教とすることには異論もあるが、孔子は巫女の子どもとして生まれ、彼が属した儒集団とはもともとは冠婚葬祭、葬送儀礼などを専門とする集団であることや（李，2012）、儀礼の精神にある仁愛の理念を孔子が思想化したとの解釈もあることから、その母体は宗教的なものであったとみなすことができる。儒教思想の一つの柱である礼も本来は自然崇拜、祖先崇拜の信仰儀式から生まれたものであったろう。しかし、儒教は、その思想内容が現世的なものであるが故に、多生を論じる仏教などと比較して宗教性が薄いとみなされてきた（李，2012）。とは言え、理と呼ばれる天の意思を仮定するところなどに、思想内容においても宗教的と呼べる特徴が見られる。

中国の儒教

中国は儒教の発祥の地である。紀元前500年頃、周が衰退して群雄割拠した春秋時代、諸国は武力と調略によって離合集散を繰り返していた。この乱世の時代であって後世に影響を与えた多くの思想家が現れたが（諸子百家）、その一人である孔子は、堯・舜による古代政治を理想とする政治思想を掲げて教団を組織し、家族愛を国家経営に当てはめた彼の徳治主義思想は弟子たちの手によって中国全域に広まった。

儒教の中核は政治思想であり、国を繁栄させ、安定してこれを治めるために

必要な制度（礼楽）、為政者の心構え、臣下の行動規範などを論じたものである。「修己治人」、即ち、国を治めるために自己を修めるという政治と倫理が一体化した思想体系である（姜，2012）。為政者には仁義を説き、臣下には忠孝秩序の尊重を強調するが、上下の違いはあれ、置かれた立場において社会的責任を果たすことがその思想の根幹にある。

儒教は、自由な思想活動が禁じられた秦代には焚書坑儒によって抑圧されたが、一転して国家教義とされた漢代には儒家が重要官職を独占するなど社会的勢力を伸ばし、彼らの手によって儒教に基づく教育体制や經典の整備が行われ、思想の体系化も進んだ。その後、南北朝時代を経て隋、唐の時代にも官許学問として発展したが、同時に、五常・五倫などが道徳思想として一般人の間に浸透した。

宋代に儒教学問は飛躍的發展を見せる。朱熹は、宇宙の原理である理とこれを体得して本来の性に立ち戻るべきとする性即理論を軸に、格物至知など聖人に至る心の修養法を論じた。一方、永康学派は、聖人の使命は国家や民衆の生活を利するところにあるとして、個人修養の社会的意義を強調した。朱子学は、北方民族金によって中原を追われ、常にその脅威に怯え続けた南宋において大成したことから、そこには夷狄排除、即ち攘夷の名分論が色濃く貫かれている。この朱子学は元代に中国全土に普及し、それ以降、中国における官吏登用門である科擧の必須学となった。明代には士大夫の学問から庶民道徳への世俗化が進み、地方の村々において儒教倫理に基づく共同体作りが行われた。

中国共産党のもとでは儒教は反動的として弾圧されたが（批林批孔）、21世紀に入って再評価が進み、論語が学校教育に取り入れられるとか、文化大革命時に破壊された儒教関連史跡が修復されるなどの動きが見られる。

韓国の儒教

韓国には、中国の古代国家である周から箕子という仁士が派遣されて最初の朝鮮国を作ったという伝説がある。孔子が「東方君子の国」として称えたほど、古代朝鮮では既に儒教的王道政治が実現されていたという説もあり、中国と朝鮮の儒教文化面での密接な関わりが示唆されている。以下、ここでは姜在彦の『朝鮮儒教の二千年』（2012）と朴倍暎の『儒教と近代国家』（2006）の2冊の著書に基づいて韓国の儒教史を素描する。

紀元前後、漢が朝鮮半島北部を統治下に置いた時期に、儒教は朝鮮半島に本

格的に伝搬されたと推測される。この中国勢力を半島から一掃した高句麗を含め、古代3国では律令制度が採用され、その官吏たちにとって儒教は必須素養であった。7世紀、朝鮮半島の統一を成し遂げた新羅は、拡大した領土の文治経営のために大量の官吏を必要とした。伝統的には門閥重視だったが（骨品制度）、一定位階以下の官吏を登用するための教育機関を設け、儒教をその中核教材とした。当時、中国を支配していた唐は周辺諸国との文化的交流を積極的に推進したので、日本同様、新羅からも多くの留学生が国際都市長安を訪れて、儒教や仏教の最新知識を吸収したが、帰国後の彼らにとって門閥の壁は厚く、中央政界での活躍は制限されていた。

新羅が減び、3国に分裂した朝鮮を10世紀に再統一したのは高麗であった。高麗は仏教を建国理念としたが、文臣崔承老が、仏教は来世のために修身を教えるが、儒教は現世の治国に必要であると主張したように、この時代、治世面における儒教の比重が強まった。科挙制度が導入されて儒教は必須科目となり、国立の官吏養成機関である国土監において儒教教育が実施された。その結果、高麗では儒教倫理で結ばれた新たな君臣関係が確立された。その後、仏教や在来宗教などに圧迫された時期もあるが、30年に及ぶ反元戦争ののち、その支配下に入ったことから、朱子学が中国からもたらされ、これに基づく教育改革が試みられた。国土監を改称した成均館は、朱子学に基づく儒教専門大学となった。

中国において明が元に代わると、朝鮮においても元との親交を背景に権勢を奮っていた支配者層が凋落して国力が低下し、北からは紅巾軍、南からは倭寇の侵入を受けた。明の援助を受け、これら外敵を排斥して朝鮮国土の回復に貢献したのが軍司令官の李成桂であった。彼は軍事力を背景に政権を掌握、易姓革命を唱えて自ら王位に就き、明の承認を得て朝鮮王朝と称し、その首都を漢陽（現ソウル）に置いた。新王朝の正当性を擁護し、国家体制作りには協力したのは朱子学者たちで、李王朝では儒教立国の理念のもと彼らの手によって君主体制と官僚行政機構の整備が進められた。

教育機関は朱子学一色で、その頂点にある科挙を通ったものが両班と呼ばれて国政に参与した。当初は、建国に功績のあった旧勲派が大勢を占めたが、理想主義を掲げる士林派が台頭し、実権を握るようになった。しかし、士林派は内部抗争を繰り返し、学問論争と政治的覇権争いが絡んだ党派抗争に明け暮れ、統治能力が低下したところに秀吉による侵攻を受けて国土が蹂躪された

が、明の支援を受けてこれを凌いだ。

しかし、恩義ある明を倒した清に反発したことから、朝鮮王朝は清に攻め込まれて滅亡の危機に瀕したが、清に服属を誓って王朝の存続は認められた。しかし、儒家たちは清を夷狄視し、中国文化の正統を継ぐのは朝鮮であるとして閉鎖的な朝鮮中華主義に陥っていった。近代に入り、清、日本、ロシアによる朝鮮半島の覇権争いに翻弄された挙句、日韓併合によって朝鮮王朝は滅びた。

韓国は、儒教文化が深く浸透した文化圏であり、現在でもその遺風が社会の根底部分、道徳体系、生活様式、年長者と若年層との関係などに残っているだけでなく、大部分の法体系の基礎をなしてもいる。恩師に対する「礼」は深く、先生を敬う等儒教文化が良い意味で深く浸透しているという意見もある一方で、儒教を歴代の為政者が国民支配を強固にするために悪用してきたという弊害面も指摘されている。

日本の儒教

日本に儒教が伝わったのは仏教よりも若干早く、513年、百濟より最初の五経博士が渡日して以降のこととされる。古代日本においては、天皇主導のもと律令制が施行されるに伴い、官吏養成と学問研究の教材として儒教が取り入れられた。その後、儒教への関心は低下したが、武家の時代を通して、公家や僧侶などの文化人を中心に、朱子学などの研究が散発的に続けられた。

日本に本格的な朱子学をもたらしたのは、秀吉の朝鮮出兵時に捕虜となった姜沆であった。彼は連行された京都で藤原惺窩に朱子学を教え、惺窩の弟子、林羅山は家康の侍講となった。徳川幕府の成立とともに、朱子学は封建支配のための思想原理として幕府公認の学問とされ、林家を筆頭に儒学者が幕府の文教政策に参画し、これを推進・統制した。木下順庵、中江藤樹、山崎闇斎などの優れた儒学者が輩出し、儒教の影響が広範囲に及んだ時代でもあった。武士は官制の学問所で立身出世のための素養として儒学を学び、民間にあっては寺子屋を通して儒教倫理が日本社会に浸透した。江戸期の儒学の特色は、朱子学や陽明学などの後世の解釈によらず、論語などの経典を直接研究する古学が発展したことで、伊藤仁斎、荻生徂徠などの手による日本独自の儒教研究が見られる。

明治時代に入り、富国強兵を急ぐ政府は、文教政策の力点を士人の素養とされた儒学から西洋実学へと移行したが、しかし、その一方で、教育勅語に忠孝

思想を取り入れるなど、儒教を国家による思想統制に利用し続けた。

当初から学問として紹介された日本では、儒教は宗教として意識されることは少なく、習俗や慣習などへの影響も韓国ほど強くはない。その一方で、『論語』の一節や朱子学の教えが挨拶文などに引用されることは今でも多く、儒教は日本人の間では道徳や倫理の古典として受け入れられている。特に『論語』は日本語訳や解説書が多数刊行され、一般の人々の間でも人気の高い思想書である。

米国の儒教

米国は多民族・多文化社会であり、人々の宗教も多様である。全体としてはキリスト教徒が多いので、アメリカ社会の様々な局面にその影響を見て取ることができるが、一方で、少数民族の文化的伝統や宗教も容認されている。儒教は中国からの移民とともにアメリカにもたらされた。1700年代後半から中国人の米国移民が始まり、中国人コミュニティの中で儒教施設が作られたが、それを超えてその思想が米国社会に広まることはなかった（タナカ, 2011）。

一方、儒教の国である韓国本国では、1700年代からキリスト教が伝えられたが、日本統治下において抗日勢力の精神的支柱として支持が拡大した。現在では韓国人の20%近くがキリスト教徒とみられている。韓国からの米国移民は中国から50年ほど遅れて始まったが、近年、米国に移住する韓国人の大半はキリスト教徒であることから、彼らは米国において儒教の普及に積極的ではなかった。

こうした歴史的経緯によって、米国における儒教は人々の生活信条や習慣に大きな影響を与えることはなかった。しかし、1970年代から、米国の主要大学ではアジア系アメリカ人研究が行われるようになり、その中で儒教も東洋思想の一つとして知識人の間に認知されるようになった（園田, 2006）。米国のメディアや知識人は、孔子や孟子の言葉を引いて政治家や世相を批判することがあるが、しかし、その多くは断片的な知識に基づくものであり、儒教に対する体系的な理解は広まっていはいない。

東アジアからの移民集団の中でも儒教は目立った宗教ではないが、しかし、忠孝といった儒教の倫理・価値観はこれら東アジア系移民の間に根強く残っていると思われ、それは彼らの親族・同胞間の強い紐帯に見て取れる。

伝統的価値観の測定

儒教と仏教は中国、朝鮮半島を経由して5世紀頃、相前後して日本に伝えられた。儒教は古代日本においては律令制度など国家体制を構築する際の政治理念として受容され、一方、仏教は精神的充実と救済など個人の内的安寧を求める人々によってその拠り所とされた。神道はそれら外来思想以前から農作業に結びついた自然崇拜的多神教として日本人の間で信仰され、その習俗や慣習に影響を与え続けてきた。儒教、仏教、神道はそれ故、約2000年近くの間、互いに影響し合い時には混じり合いながらもそれぞれ独自の水脈を保って日本人の思考や行動の仕方、即ち、価値観に影響を与え続けてきた。

現代日本人に見られる精神構造の骨格部分は、外部からの影響が最小限に止められ、内部熟成のための長い時間が確保された江戸期に形成されたと言われている（藤原，2005）。仏教は寺院の国民管理制度化に伴ってその思想や習俗が全国に普及し、これが共同体の慣習や儀式だけでなく、一般庶民の人間観・世界観に大きな影響を与えた。一方、幕藩体制の思想的擁護のために導入された儒教（特に、朱子学）は、忠孝を軸とする倫理道徳を強調するもので、これは武士階級から一般庶民に浸透していった。この面では、寺子屋など民間の教育機関が主要な役割を果たした。明治維新後、中央集権国家の構築を目指した明治政府は、江戸期に社会全体に浸透していた儒教倫理を、天皇制を軸に組み替えるにあたって、神道をその正当化の根拠とした。しかし、神道は明治政府によって国民に新たに押しつけられた思想というわけではなく、本居宣長の国学研究によると、既に江戸期において、日本古来の精神性を継承する社会思想として、人々の間に一定の基盤を形成していたと考えられる（佐藤，2005）。

日本は、太平洋戦争の敗戦によって大きな価値観の転換を経験したが、国際比較研究によると、日本は現在もお西欧諸国、あるいはまたアジア諸国とも異なる独自の文化を維持している（山口，2003）。それは、共同体的集団主義ともよべるものであり、そこには上で述べた伝統的思想が依然として息づいているように思われる。

これら3つの思想は互いに混じり合いながら日本人の生活と精神に影響を与えてきた。現代の日本社会をみると、人々は年始参りには神社に行き、法事は仏教寺院で行い、入社式では孔子を引用した人生訓が述べられる。現代においてすらこれら3つの思想は儀礼、慣習、処世訓として日本人の生活に定着して

いる。

しかし、精神面の影響はどのようなだろうか。儒教が親孝行などを強調する倫理思想であることは多くの日本人に知られているが、それ以外にどんな内容の倫理を強調するものであるかはほとんど知られていない。また、仏教や神道になると、寺社にお参りには行くが、それらがどのような世界観や人間観を持つものなのかと聞かれても、ほとんどの人は答えられないであろう。つまり、仏教、儒教、神道の思想内容は、日本人の間で明示的にはほとんど知られていないというのが現実である。それ故、これらの伝統的思想は、現代人にとって、その精神生活にはほとんど影響力を持たない過去の遺物に過ぎない可能性もある。しかし一方で、それらは儀礼、慣習、処世訓などを通して、日本人のものの見方や行動の仕方に非明示的に影響を与えている可能性もある。

我々はこうした疑問に答えるために、76項目から成る伝統的価値観尺度「日本の伝統的価値観尺度（JTVS）」を作成して、現代日本人の価値観を測定し、日本人の様々な心理社会的態度との関連を検討してきた（川嶋・大淵，2010；Ohbuchi, 2011；大淵・川嶋，2009a, 2009b, 2010；大淵・佐藤・三浦，2008）。この尺度は儒教、仏教、神道の3領域からなり、それぞれの下位尺度は表1の通りである。

表1 日本の伝統的価値観尺度（JTVS）の領域別下位尺度（大淵・川嶋，2009a）

仏教	
輪廻と法力 (11項目)	宇宙は仏の治める多くの他方世界からなり、生命はそれらの間を輪廻する。生命は仏の慈悲によって生成し、それは草木を含めすべてに及ぶと（本覚思想）いった仏教的世界観。
修身と慈悲 (8項目)	倫理と精進、慈悲と寛容、煩惱の除去などの仏教的道德観。欲望に負けず自らを慎むこと、感謝と思いやりの気持ちで人に接するなど、人としての正しい生き方を処方。
厭世主義 (6項目)	人生は苦、諸行無常などの仏教的的人生観。人生は苦悩に満ちている、この世は絶え間なく変化するはかないものであるといった仏教的厭世観を反映。
空と超俗 (4項目)	この世は仮のもので空虚（諸法無我）といった世界観と、それ故、富や名声など世間的なものに拘泥せず、清らかに生きることを良しとする（煩惱の除去）仏教的処世観。

儒教	
忠孝と義務 (11項目)	長幼の序、公益優先など、社会集団や人間関係の中で個人が果たすべき責任と義務を強調する儒教的処世観。
天意・天命 (8項目)	社会の在り方であれ、個人の成功・失敗であれ、すべては人間を越えた天によって運命づけられ決定されている(天命思想)とする儒教的世界観。
恥と世間 (5項目)	人の目を意識し、世間から非難されないよう行動すべきであるという集団主義的価値観、即ち、節度、集団優先、義務などを強調する儒教的処世観。
賢君思想 (4項目)	世の中は優れた資質の指導者によって治められてこそ意味があるという儒教的人間観。
神道	
社会的調和 (5項目)	対立や争いを避け「和をもって尊し」との調和優先的な神道的処世観。
相対主義 (3項目)	問題解決には絶対的原理に頼るのではなく、知恵を働かせ状況に応じて柔軟な対応をするのがよいとする神道的処世観。
集団の功利主義 (3項目)	ものごとの善悪は共同体に福利をもたらすか災厄をもたらしかとの観点から判断されるべきであるとする神道の倫理観。
楽観主義 (2項目)	世の中は自然に治まるべく治まっていくから、自然の流れに任せるのが一番であるとする神道の世界観に立脚した処世観。
歴史の内発性 (2項目)	社会の動きは時勢というものによって決定され、人間の力の及ぶものではない(超人為性)とする神道の世界観。
もののあわれ (4項目)	女性的で繊細な感受性が日本人の本来の心であるとする神道的人間観。

本研究の目的

文化研究には etic なアプローチと emic なアプローチがある。後者はどの社会にも共通する普遍的価値観次元があり、各文化の違いは程度の問題であるとみなす立場である。etic なアプローチの代表的研究は Hofstede (1980) のもので、彼は個人主義－集団主義、階層性－平等性、男性性－女性性、不確実性回避の4次元を見出しており、日本は男性性と不確実性回避が高く、階層性は低く、そしてやや集団主義的と特徴づけられる。更に、Schwartz (1994) は保守主義、感情的自律、知的自律、支配、階層性、平等主義、調和という超文化的

価値観の7次元を見いだしており、内容的には Hofstede のものと重なる次元もある。一方、emic な価値観研究とは、各文化には他の文化と比較できない固有 (indigenous) の価値観があると仮定し、それぞれ独自の概念的枠組みを用いて各文化の価値観を研究しようとするアプローチである。

我々が仏教、儒教、神道の伝統的価値観の研究を始めた際、これを暫定的に emic なアプローチと位置付けた (大淵ほか, 2008)。これまでの JTVS を用いて行った研究を通して、日本人の伝統的価値観の特徴が明らかになってきたが、しかしこれらが日本人だけの特徴であるかどうかは断定できない。そこで、本研究では JTVS を用いて他の文化の人々と価値観を比較し、これを日本人と比較することを試みる。本研究は、伝統的価値観尺度の3領域のうち儒教的価値観に焦点を当てて国際比較を試みる。従って、具体的な目的は、(1) 儒教から派生した日本の伝統的価値観が他の文化圏の人たちに見られるかどうかを検討し、(2) この点から見た日本人の価値観上の特徴が何かを他文化の人たちとの比較を通して明らかにすることである。

2. 方法

調査対象者と手続き

我々は、2012年11月に日本、韓国、中国において、また2013年12月にはアメリカにおいてインターネットを利用して伝統的価値観調査を実施した。4か国合計1926名から回答を得たが、記入漏れの多い回答などを除き、最終的に1899名を分析対象者とした。その国別、男女別、年代別(20代、30代、40代、50歳以上)の内訳は表2の通りである。

表2 有効回答者の内訳：比率（％）と人数

	性別		年代			
	男性	女性	20代	30代	40代	50代以上
日本 (N=454)	49.1 (223)	50.9 (231)	24.9 (113)	24.4 (111)	25.8 (117)	24.9 (113)
中国 (N=479)	51.4 (246)	48.6 (233)	24.8 (119)	23.8 (114)	25.3 (121)	26.1 (125)
韓国 (N=486)	51.2 (249)	48.8 (237)	24.7 (120)	23.9 (116)	24.1 (117)	27.4 (133)
米国 (N=480)	50.0 (240)	50.0 (240)	25.0 (120)	25.0 (120)	25.0 (120)	25.0 (120)

調査票の構成

伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S） 伝統的価値に関する国際比較研究を行うために、JTVSの短縮版の作成を試みた。まず、日本文化に固有の価値とみなされる「もののあわれ」は短縮版から除いた。他の12尺度の項目に関しては、大淵・川嶋（2009a）の因子分析結果に基づき、各下位尺度において高負荷の3項目を短縮版項目の候補としたが、「日本」という国名が入ったものや特殊な思想を表現したものは除いた。その結果、表3に示した12下位尺度37項目を伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S）とし、本研究に用いることにした。

回答者には、これら37項目の各々について「どれくらい賛成できるか」と聞き、「全くそう思わない（1）」、「ほとんどそう思わない（2）」、「あまりそう思わない（3）」、「ややそう思う（4）」、「かなりそう思う（5）」、「強くそう思う（6）」のうち一つを選択回答させた。

表3 日本の伝統的価値尺度短縮版（JTVS-S）

<p>儒教的価値</p> <p>忠孝と義務</p> <ul style="list-style-type: none"> 親を慕いこれを受する気持ちは人間のもっとも自然な気持ちである。 どんな人間関係にも義務や責任があり、これを忠実に果たすことが人間にとって大切である。 多少は不自由でも、みんなが規則を守り、社会の秩序を維持することが大切である。

天意・天命

- ・社会の理想的なあり方は天が定めるもので、指導者はこの天の意を汲み取って政治を行う必要がある。
- ・人の成功や失敗、幸福と不幸は、すべて天が決めたものである。
- ・自分の役目や立場は天が与えたものであり、それがどんなものであれ、天命としてこれを果たすべきである。

恥と世間

- ・何かをするときには、まず、世間からどう思われるかを第一に考えるべきである。
- ・人から非難されたり、後ろ指を指されるようなことはすべきではない。
- ・何においても、世間から孤立したり、つまはじきにされることだけは避けなければならない。

賢君思想

- ・国であれ会社であれ、指導者というものは、専門的知識や技能よりも、人間性において優れた人がその地位につくべきである。
- ・国であれ会社であれ指導者には人格と識見が必要で、規則や罰ではなく、その優れた人間性によって他の人たちを導くことが期待される。
- ・政治の指導者が自らの人間性を磨き、国の品位を高めるよう努力するなら、国民は進んで国をうやまい、これに従うであろう。

仏教的価値

輪廻と法力

- ・人は死ぬと、別の世界に生まれ変わる。
- ・この世以外にも多くの世界があり、天国や地獄もそうした他方世界の一つである。
- ・生前の行為の良し悪しによって、死後の世界での扱いが決まることを忘れてはならない。

修身と慈悲

- ・うそ、非難、中傷、悪口などは自分自身の心を汚すものだから、こうしたことばづかいは慎むべきである。
- ・良い行いをするときには、人に知られることや相手に喜ばれることを期待せず、ただ人のために尽くすのが本当の思いやりである。
- ・良い行いを継続し、悪い行いは避けるよう心がけるべきである。

厭世主義

- ・人の人生は、苦しみや悩みに満ちている。
- ・人の一生には、欲求不満、離別、憎しみ合いなど多くの苦しみがある。
- ・病気や死だけでなく、人間にとっては、生きることも苦しみである。

空と超俗

- 欲望がうずまく世間とのつきあいを離れ、孤独に生きることが、この世の真理を求める最善の道である。
- この世界の様々な愛着を断ち、心を清めることで、本当の充足が得られるであろう。
- この世のすべては、まぼろしのよう、実体のないものである。

神道的価値

社会的調和

- 人々は、互いに自己主張を抑え、譲り合って物事を解決していくことが重要である。
- 自分を抑えても、人間関係を大切にすべきである。
- 理念やイデオロギーを強く主張するよりも、おおらかな気持ちで事にあたる方が、世の中は結局うまくいく。

相対主義

- 世の中に「ただひとつの正義」「唯一の真理」といったものは存在しない。その時々によって、個別に判断をしていくのが正しい知恵である。
- 社会の問題については、どんな時にも通用する普遍的な原理というものはない。その場その場で適切な対応を心がけることが大切である。
- 世の中に絶対に正しいものは存在しない。状況によって適切な解決策を探っていく必要がある。

集团的功利主義

- 物事を決めるときは、所属する集団（会社、学校、国家など）への影響を最優先に考えるべきである。
- 人間は、常に、自分が所属する集団（会社、学校、国家など）の利害を考えて行動すべきである。
- 人間の人生は、個人としてよりも、社会や集団（会社、学校、国家など）のために尽くしてこそ意味がある。

楽観主義

- 世の中の動きは、人間の知恵を越えたものであり、自然の流れに任せるのが一番である。
- 世の中のことは、人の知恵でどうにかしようとする、かえって不都合なことになりがちで、自然の流れに任せるのが一番である。

歴史の内発性

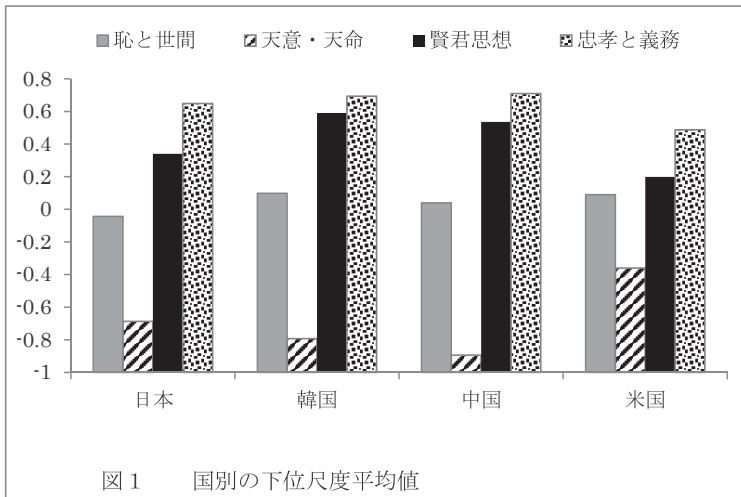
- 社会を動かすのは個人の意志や思惑ではなく、時勢や天下の大勢といったものである。
- 社会の動きには「いきおひ」「はずみ」といったものがあり、これがいったん動きだすと、個々人の力では止めたり変えることはできない。

3. 結果

儒教的価値観の国際比較

文化圏の異なる人たちは、こうした質問紙調査では、項目内容にかかわらず反応の独自のスタイルを示すことが比較文化研究者の間では知られている。例えば、どの項目を読んでも「そうだな」と思って肯定的に反応する黙従傾向、回答尺度の中心部分の選択肢（「3」や「4」）を選ぶ中間反応傾向、逆に、両端の選択肢（本研究の場合は「1」や「6」）を選ぶ極端反応傾向などが知られている。日本人は中間反応傾向があり、米国人は極端反応傾向があるとされている（辻本，2006）。それ故、比較文化研究において素点を分析に用いることは避ける方がよいとされていることから、ここではJTVS-Sの項目得点を個人内で標準化し、その平均値によって下位尺度得点を作った。

この個人内標準得点を用い、儒教価値観4下位尺度について国 x 性別 x 年代 x 下位尺度の分散分析を行った。まず、国及び下位尺度の主効果とそれらの交互作用が有意だった ($F(3, 1867) = 10.849, p < .001$; $F(2.602, 4858.370) = 1899.360, p < .001$; $F(7.807, 4858.370) = 46.080, p < .001$)。



下位尺度間の比較では、忠孝と義務 (.635) が最も高く、賢君思想 (.416)、恥と外聞 (.046) と続き、天意・天命 (-.683) は最も低かった。この順番はどの国でも同じだった。

下位尺度得点で国の比較をすると、恥と世間では日本が最も低く韓国と米国との差が有意だった。天意・天命では、米国が最も高く、他の国との間に有意差が見られた。次いで日本が高く、中国との差が有意だった。賢君思想は韓国と中国が最も高く、次いで日本が高く、米国は最も低かった。これらの差は有意だった。忠孝と義務では、アジア 3 国が米国よりも有意に高かった。

儒教的価値観の世代差

年代が含まれる効果の中では、価値観 x 年代と ($F(7.807, 4858.370)=1.889, p<.05$)、価値観 x 年代 x 国 ($F(23.420, 4858.370)=2.319, p<.001$) の交互作用が有意だった。これを分析するために、国別に下位尺度と年代の関係を示したものが図 2～図 5 である。

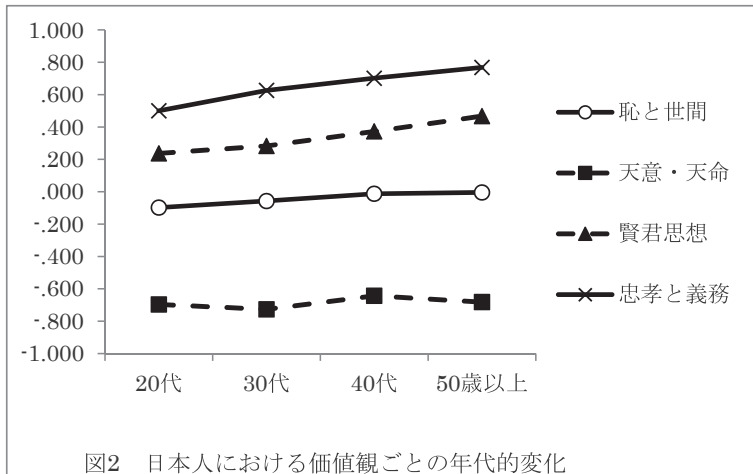


図2 日本人における価値観ごとの年代的变化

日本人では、全体として年長者ほど高くなっているが (図 2)、有意差が見られたのは、賢君思想と忠孝と義務だった。賢君思想では 50 歳以上の参加者が 20 代、30 代の参加者よりも有意に高かった。忠孝と義務に関しては、20 代

よりも 40 代及び 50 歳以上の参加者が有意に高かった。

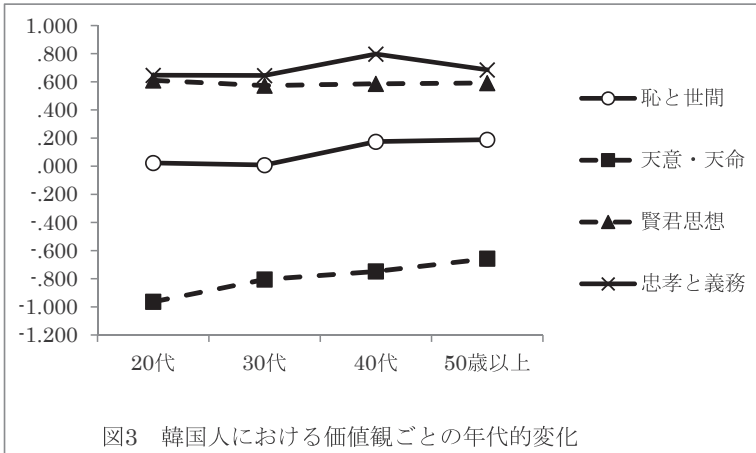


図3 韓国人における価値観ごとの年代的変化

韓国人においても、同様に、全体としては年長者に高い傾向が見られたが(図3)、有意だった価値観は日本と異なり、恥と世間、天意・天命だった。恥と世間では50歳以上の参加者が20代、30代の参加者よりも有意に高かった。天意・天命についても50歳以上の参加者が20代の参加者よりも有意に高かった。

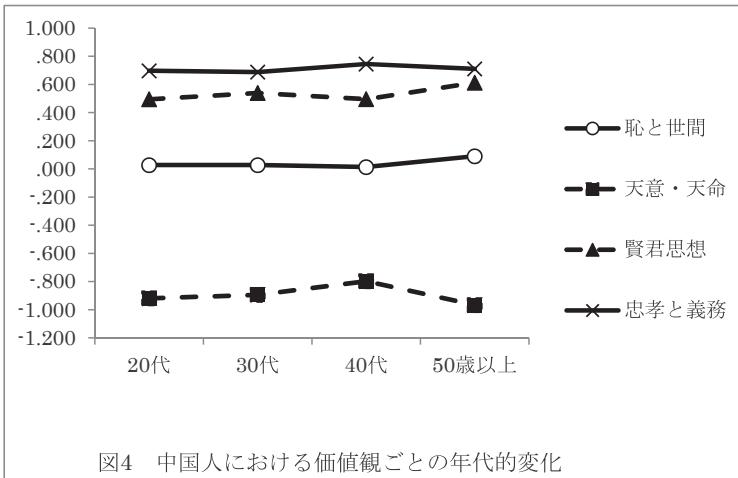


図4 中国人における価値観ごとの年代的変化

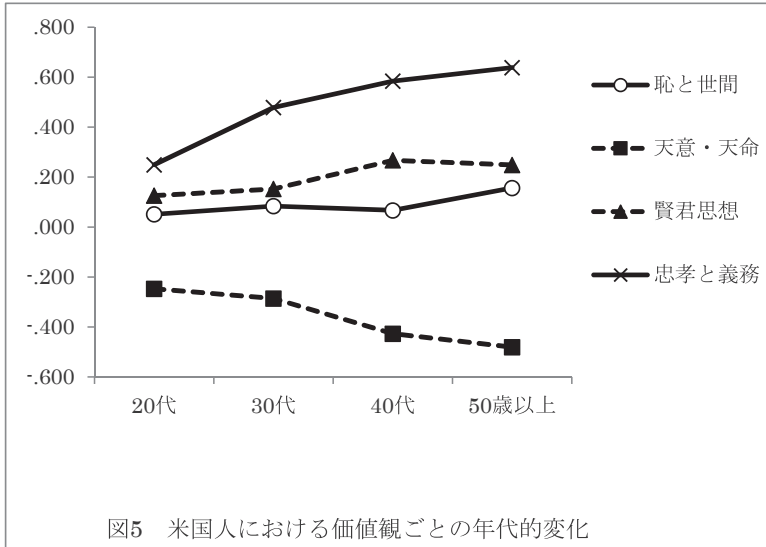
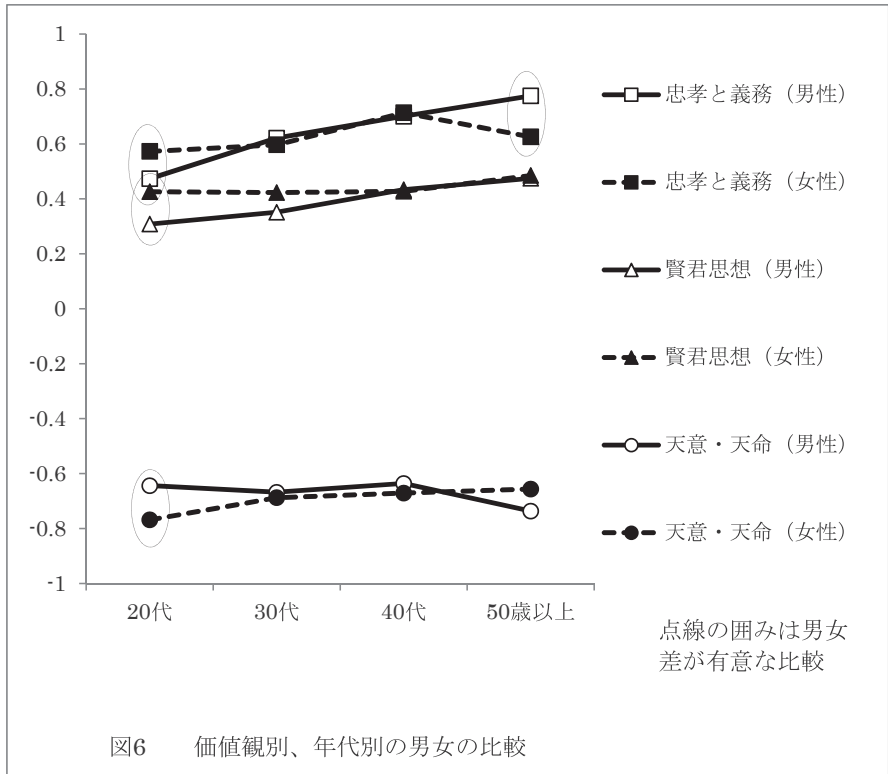


図5 米国人における価値観ごとの年代的変化

中国人においては年代間の有意な差はみられなかった（図4）。アメリカ人においては、天意・天命は年長者に低く、忠孝と義務は逆に年長者に高い傾向が見られた（図5）。天意・天命において、50歳以上の参加者は20代の参加者よりも有意に低かったが、忠孝と義務に関しては30代、40代、50歳以上の各年代の参加者は20代の参加者よりもいずれも有意に高得点だった。

儒教的価値観の性差

4要因分散分析の結果、価値観 x 性別 x 年代の交互作用が有意だった ($F(7.807, 4858.370) = 2.426, p < .05$) だった。そこで、価値観別、年代別に男女の比較をしたものが図6である。



この図で男女の比較が有意だったのは4か所で、忠孝と義務に関しては、20代は男性よりも女性が高く、50歳以上では逆に男性の方が高かった。図を見ると、女性ではあまり年代差が見られないが、男性では明らかに年長者において高く、これがこうした男女差を生み出したものと思われる。

賢君思想では、20代において男性よりも女性の方が高かったが、これも、男性においてのみ年長者が高くなるという傾向を反映した男女差のように思われる。天意・天命においては、20代において男性が女性よりも高得点だったが、この価値観では、男女とも明瞭な年代差は見られない。

4. 考察

本研究では、日本、韓国、中国という伝統的に儒教文化が強いとされている東アジア諸国と、それが弱いと仮定される米国を対象国に、それぞれの国に住む一般市民を対象に行った社会調査によって、儒教的価値観の違いを検討した。

儒教的価値観の国別比較

質問項目を用いた調査において国別比較分析を行う場合には、文化的反応傾向によるバイアスを避けるため、何らかの相対値に変換して行うのが通例である。本研究では、JTVS-Sの項目得点を個人内で標準化し、これを用いて下位尺度得点を作成した。相対値を使った分析では、国別の比較には余り意味がなく、むしろ、ひとつの国の中で下位尺度間の差異に注目することになる。

この分析結果を見ると（図1）、韓国と中国において高いのは忠孝義務と賢君思想だった。儒教的伝統を持つこれら2国においてそれらが強かったことは、これら2下位尺度によって測定される価値観が現代においては、儒教的価値観を代表するものであると言えるであろう。それはつまり、社会的序列と権力格差を正当化し、各人が序列内で与えられた地位と役割に忠実に行動することを善とする価値観で、一言でいえば封建的価値観と言えるものであろう。対象4ヶ国中、米国においてこれらの下位尺度が最も低かったことは、この解釈を支持するものである。

どの国でも比較的支持が低かった他の2下位尺度のうち、恥と世間では国の違いが余り見られなかった。社会的関係と社会的評価を重視するこの価値観は集団主義文化を反映するものと考えられたが、非集団主義文化圏である米国においても東アジア諸国と比較して、特に低いわけではなかった。このことは社会的関係への関心は個人主義文化圏においても決して弱いものではないことを示唆している。

分析に用いられた得点が相対値であることを考慮すると、この最後の解釈は誤っている可能性もある。仮に、米国において儒教の4下位尺度がすべて低得点だったとすると、恥と世間も相対値としては一定の値になる可能性があるからである。しかし、我々が別の論文で、同じ調査データを用いて、相対値ではなく支持率で国別比較を行ったところ、米国の儒教下位尺度の支持率は東アジ

ア諸国と比べて低いわけではなく、恥と世間は、中国よりは低いが韓国と同レベルで、日本よりはむしろ高かった（大淵，2014）。それ故、米国人の間でも社会的関係への関心が低いわけではないという上記の解釈には一定の妥当性があると考えられる。

儒教的価値観の年代差

図2に示されているように、日本と韓国ではどの下位尺度も年長者ほど高まる傾向が見られたが、統計的に有意だったのは一部の下位尺度で、かつ両国間では異なっていた。しかし、儒教的価値観が両国において年長者において優勢であることは、これらが伝統的な価値観であることを示唆している。しかし、日本でも韓国でも、年代差は我々が予想したほど顕著ではなかった。

第2次大戦後70が経つ日本では、本調査の対象となった60歳までの人たちはみな戦後の民主教育を受けて育ってきた人たちである。そこでは個人の権利と自由を強調する個人主義的価値観が優勢だった（阪本，2007）。家庭や地域にあっては戦前・戦中世代が依然として影響力を持っていたとしても、戦後教育を受けた世代の人たち間では、伝統的な封建的価値観は次第に弱まっていったと思われる。

共産主義勢力と自由主義勢力が衝突した朝鮮戦争のため、韓国の実質的な戦後は日本から8年遅れ、1953年の休戦協定から始まったと言ってよい。しかし、太平洋戦争が終結した1945年の夏、日本軍が朝鮮半島から撤退すると、その南半分は米国を中心とする国連軍の委任統治下に置かれ、そこに成立した大韓民国では民主主義教育が開始されたため、個人主義の強い教育を受けたという点では、韓国人の対象者たちも日本人と同じと考えられる。儒教的価値観に関する日本と韓国の世代パターンが類似しているのはこのためと思われる。

米国では、日本、韓国とは異なる年代パターンが見られた。忠孝と義務は年長者ほど高かったが、天意・天命は逆に低かった。どの社会でも一般に若年世代ほど個人主義が強くなり、年長になるにつれて家族、地域共同体、勤務先などへの関心が強まり、集団主義的になるとされる（Triandis, 1995/2002）。集団主義社会とされる米国でも同様で、これは本研究では忠孝と義務に見られる。しかし、天意・天命には逆パターンが見られた。この下位尺度に関しては、米国の若年層の方がむしろ儒教的価値観を受け入れていた。このことは、グローバリ

ゼーションによる影響が双方向的なものであり、西欧の若者もまた東洋の伝統的思想の影響を受けている可能性を示唆するものである（大淵，2014）。その一方で、米国が栄光と繁栄の頂点にあった戦後20年間、個人主義の最も強い米国文化の中で育った年長者たちは、むしろ強固な個人主義的価値観を形成しているものと思われる。

しかし、米国の年長者の矛盾した価値観については、更に検討の必要があると思われる。忠孝と義務、天意・天命という下位尺度によって測定される価値観の内容が類似していても、回答者は儒教とは異なる宗教理念や思想信条を念頭にこれらに対して肯定的に反応した可能性があるからである。この可能性については、米国人の価値観に関して更に広範な資料を収集して検討する必要がある。

儒教的価値観の性差

図6に示されているように、儒教的価値観に関して性差は余り大きなものではなかった。いくつかの下位尺度に関して20代と50代に有意な性差が見られたが、その主な理由は、図6からうかがわれるように、女性よりも男性において年代間の変化が大きいことである。特に忠孝と義務、賢君思想では男性は年長者ほど高まることが明瞭に見て取れる。これらの下位尺度は、儒教的価値観を代表するもので、上で述べたように、社会的序列と権力格差を正当化し、各人が序列内で与えられた地位と役割に忠実に行動することを善とする封建的価値である。男性においてのみこうした年代的变化が見られることは、男性の生活サイクルの中にこうした価値観の形成を促す経験が含まれていることを示唆している。

それは言うまでもなく職業経験であり、とりわけ長期にわたる組織の一員としての活動経験であろうと思われる。このことは、現代においても、職業生活には儒教的価値観と親和性の強い要素が含まれていることを示唆するものである。日本では、最近でも、企業の入社式や朝礼などではしばしば論語の一説を引いた訓示が見られる（清水建設，2015）。他の対象国においてもこうしたことが見られるかどうかは不明だが、こうした行事においてスピーチには類似の内容が語られる可能性は高いと思われる。この点に象徴されているように、確かに、企業組織においては、集団的目標、個人の貢献、リーダーシップなどが

強調されるので、職業生活は儒教的価値の形成を促すものであると言えるであろう。

引用文献

- 朴倍暎 (2006). 儒教と近代国家. 講談社.
- 藤原正彦 (2005). 国家の品格. 新潮社.
- 猪口孝・田中明彦・園田茂人・ティムール・ダダバエフ (2007). アジア・パロメーター：躍動するアジアの価値観、アジア世論調査 (2004) の分析と資料. 明石書店.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Hofstede, G. (1980). *Culture's consequences: International differences in work related attitudes*. Beverly Hills, CA: Sage.
- 姜在彦 (2012). 朝鮮儒教の二千年. 講談社学術文庫.
- Ohbuchi, K. (2011). Social class and values in Japan. In K. Ohbuchi & N. Asai (Eds.), *Inequality, discrimination and conflict in Japan: Ways to social justice and cooperation* (pp. 22-40). Balwyn North, Australia: Trans Pacific Press.
- 大淵憲一 (2014). 伝統的価値観 (仏教、儒教、神道の価値) の国際比較：価値観支持率を指標とする分析. 東北大学文学研究科年報, 64, 65-86.
- 大淵憲一・川嶋伸佳 (2009a). 日本の伝統的価値尺度の作成：仏教、儒教、神道・国学思想に基づいて. 文化, 73 (1, 2), 110-140.
- 大淵憲一・川嶋伸佳 (2009b). 現代日本人における仏教、儒教、神道・国学思想の受容：社会調査による分析. 文化, 72 (3, 4), 101-122.
- 大淵憲一・川嶋伸佳 (2010). 現代日本人による伝統的価値の受容：社会的属性との関連. 文化, 73 (3, 4), 21-46.
- 大淵憲一・佐藤弘夫・三浦秀一 (2008). 現代日本人の価値観と伝統的思想：仏教、儒教、神道・国学の思想内容と調査項目の作成. 東北大学文学研究科研究年報, 58, 154-180.
- 李相哲 (2012). 東アジアのアイデンティティ：日中韓はここが違う. 凱風社.
- 阪本秀夫 (2007). 戦後民主主義と教育の再生. 明石書店.
- 佐藤弘夫 (2005). 概説日本思想史. ミネルヴァ書房.
- Schwartz, S. H. (1994). Beyond individualism/collectivism: New dimensions of values. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. C. Choi, & G. Yoon (Ed.), *Individualism and collectivism: Theory, application, and methods* (pp. 85-119). Newbury Park, CA: Sage.
- Schwartz, S. H. (2008). Cultural value orientations: Nature and implications of national

- differences. Moscow, Russia: State University-Higher School of Economics Press.
- 清水建設 (2015). 平成 27 年度入社式社長挨拶要旨. ニュースリリース 2015 年. https://www.shimz.co.jp/news_release/2015/2015001.html (2015 年 7 月 12 日アクセス).
- 園田節子 (2006). 北アメリカの華僑・華人研究: アジア系の歴史の創出とその模索. 東南アジア研究, 43, 419-436.
- タナカ, ケネス (2011). アメリカ仏教: 仏教も変わる、アメリカも変わる. 武蔵野大学出版会.
- 高野陽太郎 (2008). 「集団主義」という錯覚: 日本人論の思い違いとその由来. 新曜社.
- Triandis, H. (1995). Individualism and collectivism. Boulder, CO: Westview. (神山貴弥・藤原武弘 (編訳)、個人主義と集団主義: 2つのレンズを通して読み解く文化. 北大路書房、2002)
- 山口勲 (2003). 社会心理学: アジアからのアプローチ. 東京大学出版会.

A Cross-National Study of Traditional Values: Confucian Values in Japan, Korea, China, and USA.

Ken-ichi OHBUCHI

We made a short version of the Japanese Traditional Value Scale (JTVS-S) that we developed by an emic social psychological approach to the Japanese culture, focusing on three traditional thoughts of Confucianism, Buddhism, and Shinto. In the present study, we attempted to examine whether the Confucianism values are commonly seen in other countries than Japan. We administered JTVS-S including four Confucianism sub-scales to people from three East Asian countries (Japan, Korea, and China) and USA by online survey, and we obtained 1899 respondents as a total, who were sampled almost equally across gender and age (twenties, thirties, forties, and older than 50). The results showed that ‘piety and obligations’ and ‘Heaven’ s will’ were higher than the other sub-scales in Chinese and Korean participants who were assumed to have the Confucian traditions. These seems to reflect the feudal values that justify social ranking and power differences and demand people to behave according to roles attached to a given social position. These values were higher among older participants, especially male ones, in East Asian countries. This implies that social experiences as organizational members in people’ s vocational careers shape the Confucian values. On the other hand, there was a different age pattern in the United States than the East Asian countries. Although they endorsed some collectivistic values apparently associated with the Confucianism, it is possible that these values have different religious or ideological backgrounds.